佛教ぎふ

発行　昭和57年8月1日
岐阜県仏教会事務局
岐阜市西野町3丁目1番地
岐阜西別院内 TEL(66)7803
編集　出版委員会
1部送料共　80円

梵音響流

昭和四十二年秋、第十五回全日本仏教徒大会を岐阜県で開催するに先立ち、一年間、毎朝ラジオ岐阜を通じて、梵鐘を鳴らし、仏教徒に呼びかけを行い、遂に十一万七千世帯の組織化を達し、大会は二万五千の参加者で盛り上った。以来、会の発展はめざましいものがあり、全国仏教界に少からぬ反響を与えてきた。

このたび、家庭に校内にまた街頭に暴力ざたが絶え間ない現実にかんがみ、何はさておき、人の心を和わらげ、病床の人にもなぐさめを、絶望の人には力強く生きるよろこびを、悩める人に救いの手をさしのべるべく、各界の非常な協賛を得て、去る四月四日の日曜朝よりラジオ岐阜に岐阜県仏教徒の時間を設けて放送を開始した。

放送サイクルと時間は別記参照せられたく、既に大方の希望により放送原稿ダイジェスト版の出版が企画されている。

みんなで聞きましょう
岐阜県仏教徒の時間
毎週日曜日午前7時35分～7時50分
GBS岐阜放送ラジオ
岐　阜　1,431KHZ　　高　山　720KHZ
多治見　1,431KHZ　　萩　原　1,197KHZ
恵　那　1,485KHZ

「梵音響流」これはわが国楽壇のかつての巨匠山田耕筰氏が作曲した交響仏教詩曲「巴里仏国寺へささぐる歌」の改題でもある。

詩は世紀の詩人野口米次郎氏のささげたものである

この曲は楽人山田氏が東洋人、もっとはっきりいへば生れながら、仏陀の心にひたってきた一人の男として、古来わが国の人々が諸仏諸菩薩を讃嘆供養し奉ってきた、したしみぶかい大太鼓、木魚、銅羅、大鑿、小鑿等の仏教楽器をとりいれて、洋楽器の旋律音のなかにおほらかな梵音を響流させて、大法悦境の叙述をこころみた野心曲である。

法の音に
こころのくにを
見出さん
詩人野口はこう詠いだしている。

○

人間の心を養う糧はまさしく音声である。人間は音声なき世界に住み得ない。また音声なき世界は考えられない。音声こそ世界そのものといっていい。

経にも世界は一切衆生の業の音声であり、浄土は清浄な音声の世界であると誌るされている。

ものの音はものの本体である。ものの価値である。ものの本体をあらわし、ものの価値をしらせるものはそのものの発する音声である。美るわしきものは美るわしき音声を発する。美るわしき音声はやがて人の心を美るわしくする。心の豊かさを欲せば、美るわしき声を聴かねばならぬ。

○

美音はまた鍛錬の凱歌である。鍛錬されざるものの音は美るわしくない。

昔より大鼓の皮を鞣すに人の出入繁きところに張って出入毎に踏ますという。

私は学生の頃、洛南深草の里に下宿していた。夕方散歩の折、畑の中の堀立小舎の中で大鑿を作っているのを見たことがある。鉄の鑿で一つ打っては鈴桿でたたき、しづかに音をきいている。近所の迷惑をさけるために遠く人家を離れたところで、ひたすら精進する工作態度に見惚れたことを覚えている。一打しては一音をきく。さらに一打しては一音をきく。夕闇の中に一打一音が流れてゆく。朝夕仏前に梵音をただよわすあの鑿はかような心すました精進のたまものである。

鍛えぬかれた清浄な音をきくところに心の豊かさがめぐまれる。

本願の名号はかぎりなき研究と量りなき実験を透過した弥陀仏の清浄な願心より発せられた衆生招喚の梵音であり、呼び声である。

この梵音をきけば洗除心垢、浄妙の道果を得、歓喜湧躍すると経に誌るされている。

やさしい音声を失うときものはひからびる。やさしい音声にみたさるるとき、人の心はやわらぐ、諦聴、諦聴、しづかに日曜放送をききましょう。

―橘　感月―

〝岐阜県名僧名刹墨蹟展〟開催

今秋を期して

―岐阜高島屋百貨店で―

岐阜県仏教会・檀信徒会では岐阜日日新聞社と共催し、今秋高島屋百貨店を会場に〝岐阜県名僧名刹墨蹟展〟を開催することとなった。

これは青少年の非行防止と「お経を習いましょう運動」による青少年の善導教化に協賛するもので、かねてからその開催が待望されており、その成果が期待されるもので、檀信徒会会員を始め一般市民の来場が望まれるものである。

開催の主旨は、次のようである。

最近青少年の非行と教育の荒廃は目を覆うものがあります。敗戦の中から困難に耐え、今日では世界第二の経済大国と云われる程の復興をとげた我国に於いて誠に胸の痛む思いであり、やがて来る二十一世紀を背負って立つこれら青少年の前途に憂慮を覚えるのであります。

私共岐阜県仏教会は「お経を習いましょう」運動を展開し、毎年岐阜市に一万名、県下各地に三万名の青少年、児童に仏教精神による青少年児童の善導を呼びかけ、既に十六年を経過したのでありますが、今後益々この運動の必要性を痛感し、思いをあらたにして推進したいのであります。

〝岐阜県名僧名刹墨蹟展〟はこのような意義をになって開催され、県内及び本県出身者の墨蹟が展示即売されるほか、県内の仏教文化財の一部も展示される予定である。

さらに本展によって協賛される資金は、

一、経本、念珠の配布
一、仏教々材の研究、制作配布
一、母子家庭、交通遺児等恵まれない人への励まし
一、青少年児童の善行表彰その他を重点的に順次実施し、これに役立たせようとするものである。

読者の声

感謝のことば　お経に生かされて

私は主人をなくし、三年生の男の子をかゝえ途方にくれたのでございます。毎日働きに出乍らこの厳しい社会をのりこえて来れましたのは毎日拝読するお経様でございました。夕食がすむと寝る前に子供と二人お仏檀の前で読経し「どうかみ仏様、ご主人様私達二人をお守り下さい」と必死の思いでおがみました。幸い子供は順調に育ち、高校も良い成績で卒業し、念願の国立大学に合格することが出来ました。早速お仏檀の前で主人に報告し、ご住職様にも報告がてらお礼に行きました処「色即是空、空即是色」と色紙に書いて頂き、これから東京に出発する我が子に手渡しました。私達二人の家族はお経様によって救われ守られたと思っております。今は一人で我が子の無事卒業を念じ乍らお経を拝読しております。

（一母親より）

○

私には長い間待っていた男子が出生し、元気で外に遊びに出かけます頃、突然交通事故でなくして仕舞いました。家族一同が悲しみの渕に沈みました。私共は夕食が終ると家中で毎晩お正信偈をあげることに致しました。かなしみも怒りも忘れて一心にお経をとなえました。夜ねる時も、お勝手、洗濯をし乍らもお経を口ずさみました。「光觸カムルモノハミナ、有無ヲハナルトノベタモウ」節をつけてよんでおりますと、涙が出てし方がありませんでした。日一日と過ぎていろいろの思いが少しづゝ遠ざかって参りました。怒りもうらみも、お経を口ずさみながらとおり過して参りました。今も家中でかゝさず夜、お正信偈をあげております。そしてお説教に聞きます逆縁の尊いみ教えを味わゝせて頂いております。

（一主婦より）

県仏教会事務局移転

岐阜県仏教会事務局は昭和四十二年以来、岐阜市千手堂北町の善福寺内におかれていたが、今年四月から岐阜市西野町三丁目一番地本願寺派岐阜別院内に移転した。

今后共、仏教会、檀信徒会員の来訪が待たれているものである。

小さな親切　大きな喜び

―本巣郡仏教会　檀信徒会―

旋風打

▼近年さまざまの非情な犯罪や、麻薬使用者の増加、離婚、老人問題などと共に、青少年の非行、ことに校内暴力が目立ち、教育者や父兄、当事者方がその対策に苦慮しはてている。

▼非行や暴力、犯罪の低年令下は、いったいどこに問題があるのだろうか。校内暴力など身近かなだけに、いったいどう対処したらよいのだろうかと苦慮せずにはいられない。他人ごとではないのである。

▼これらを時代や世相の一面、環境のせいになすりつけることは簡単である。しかしそんなことでは解決できる問題ではない。夫婦にしても親子にしても、さらには自分自身にしても思うままにならないのが人間の現実である。

▼人は〝独生独死独去独来〟し、それぞれの業により、その人生を歩む。さまざまの教育や縁、環境をうけとめるのも最后にはその主体たる私たち自身、個人である。

▼NHKテレビ六月二十日の放送の〝面白ゼミナール〟でこんなクイズがあった。人は生れると共に二五〇億個の記憶する神経細胞をもつ。それが四十代を過ぎる頃から毎日四十万個づつなくなり、最終二百三十才ごろで零となるというのである。つまり、仏教の生老病死といわなくとも、人間はその歳で全くの馬鹿、人間ではなくなるのである。

▼人間は有限である。その人間が、広島のある中学校の先生がわが子の死を機縁に朝夕生徒にみ仏に礼拝することを奨励された結果、他のクラスの模範ともなり、校風もちがってきたということである。

▼解決出来ない人間の問題が、そうしたなんらかのご縁を通して、新らしい人生の出発に向うこともまた可能なのである。

（藤田）

夏やすみには
みんなで
お経を
習いま
しょう
祖先を敬い
父母を大切にし
明るい家庭を
きずくために
主催　●岐阜県仏教会・檀信徒会
協賛　●全日本仏教会
●お申込みは近くのお寺又は檀信徒会役員宅へ……

天台宗梶井御殿梨本門跡三千院門主水谷教章師筆天台宗所依経典法華経勸持品に六の忍を釈尊が説かれた。

当寺は伝教大師の開基二世慈覚大師以来法親王が三十一人住職さる。格式ある寺院。明治四年に五十世昌仁親王が落飾して梨本宮家になったため、それ以来寺号を三千院と公称す。

全部落が読経

―野村　芳兵衛―

私は、長良川の上流、洞戸で生まれた。父母は、同じ洞戸村でも尾倉という部落で生まれたのであるが、隣りの飛瀬という部落に住むようになったのである。尾倉は、全部落そろって、法久寺の檀家であったが、飛瀬では、私の家だけが真宗であった。夜になると、畑から帰ってきたおじいさんが、手足をきれいに洗うと、仏檀に燈明をとぼして、読経を始める。それで、私たち子どもも友だちと別れて、家へいそいだ。早くかえれた時は、おじいさんのすぐ後に並んで読経ができたし、遅い時は、もう、おじいさんの後には、おとうさんも、おかあさんも、数珠を持って並んでいた。

おかあさんから、お数珠をもらって、みんなの後に並んだ。家内がそろって勤行していると、子ども心にも、家族のつながりがひしひしと感じられた。

報恩講には、尾倉の本家へおよばれで行った。夕方になると、こちらの家でも夕べの勤行、あちらの家でも夕べの勤行、全部落が読経の響きに包まれるのであった。これは、八十年昔のことだが、今は、どうであろうか。

信頼ということは、よかれ悪かれ、一しょという姿勢であり、その気持ちである。

終戦後、「家族の和は、話し合いから」と言われたけれど、話し合いは、和につながるとは限らない。家族の和は、夕べの勤行の中でこそ、完全に育てられると私は思う。

あそんだら お葬式

名和昆虫研究所の先代の名和先生が、私にこんな話をされたことがあった。

「おかあさんは、どんなつもりでしょうかなあ。日曜日には、子どもをつれて、金華山へ登って、子どもに花をつませ、その花を裸のまゝで手に持たせるから、やがて枯れてしまう。帰りには、私のところへきて、昆虫の標本を見させてくださることはありがたいが、枯れた花を子どもにほかれとおっしゃる。おかげで、日曜日は、私の家の庭は、子どもの投げ捨てた花で一ぱいですよ」と、笑われた。

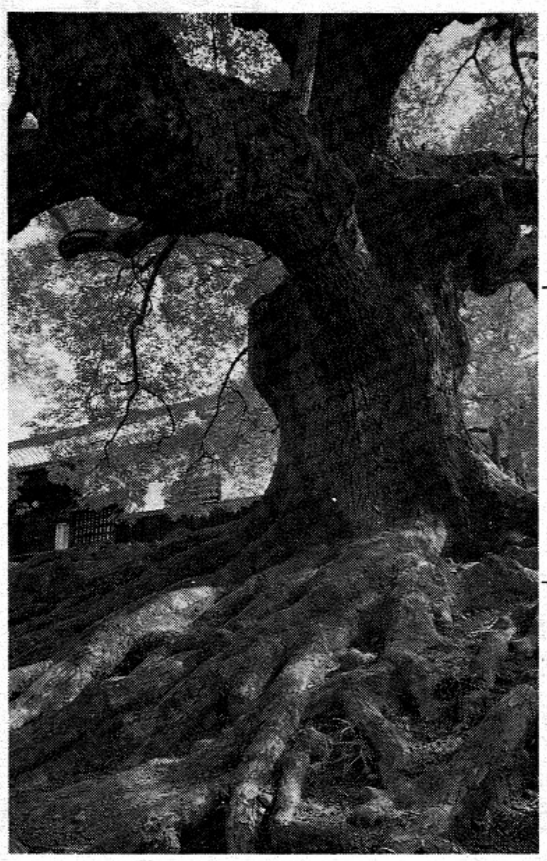
花も生きているのだからできたら、咲いたまゝで、その美しさをたのしみたいものだ。もしも、摘ませるなら、「持って帰って、水にさしてあげましょうね」と、教えられないものであろうか。それには、おかあさん自身、野山へ出かける時には、ビニールの袋ぐらい用意して出かけて、袋に入れて持たせるぐらいの心遣いがほしいものだ。

私は、聖徳学園女子短期大学で、保育原理の講義を持たせて貰っている。幼児教育学科の学生に、自然あそびの演習をさせる時、「花も生きているのです。自然あそびのために、死んで貰うのですから、一つの花も無駄にしないで、これ一本と思って大事に使ってください。大事に使えばいい玩具がつくれます。残った花は、前へ持ってきてください。ビンにさして置きます。材料になった切れ端しは、自然あそびのために、死んでくれたのですから、机の下へ落して置いて、足で蹴飛ばしたりしないで、お葬式をしてやってください。後の隅にある屑箱は、墓地です。花に頭をさげて、お葬式をしてから、屑箱へ入れてください」と言っているが、学生は、一本の花も落して置かないようにしていてくれる。お葬式をしていてくれる。

お釈迦さまの教えをいただくことが読経だから、毎日のくらしの中で、お釈迦さまの教えをいたゞくことも、また、読経の一つだと私は思っている。

聖徳学園女子短期大学
名誉教授

著書○「子供の智慧をのばす」
○「幼児の自然あそび」
他多数



県仏檀信徒部会 代表者会議開催

六月二十一日岐阜市西別院会館会議室において、五十七年度県仏檀信徒部会代表者会議が開かれた。五十六年度事業報告並に決算報告、五十七年度事業計画並に予算案について協議され、全案可決された。

歴史のコーナー（その3）

美濃の曹洞宗

禅、を基本とする宗教は臨済宗・曹洞宗・黄檗宗の三宗派を総称して禅宗と呼称するが黄檗宗は江戸時代に中国僧、隠元によって宇治の萬福寺を中心として明国風の禅を伝えた宗派で本県では数少なく籠大仏で有名な岐阜市大仏町正法寺のほか二三ヶ寺にとゞまる。

曹洞宗は永平寺派と総持寺派にわかれ、なかでも総持寺は明治三十一年の大火に罹り伽藍の大半を焼失し、これを契機に東国に信徒の拡大を図り神奈川県鶴見に堂塔を新築しこれを総本山とし能登の総持寺は素院として現在に至っている。

曹洞宗の開祖は道元禅師である、禅師はおくり名を承陽大師と申し上げ正治二年（一二〇〇）当時の権力者、久我通親の子として生まれ三歳にして父を亡ない八歳の時母にも死別し伯父のもとで生長し十四歳にして叡山に登り天台座主公円のもとで出家した。その年は法然が東大谷で法難の生涯を閉じた年である。

道元は学ぶ事一年余にして叡山を去り諸寺を訪れて自らの師と仰ぐ人を尋ね乍ら研讃に努めたが満足を得られず、たどり着いたのが建仁寺であったが既に栄西は歿した後であり栄西の高弟明全について禅の真随に触れ禅の厳しさを学ぶうち、望みどおり貞応三年（一二二三）師明全と共に渡宋する事になった。道元二十四歳であった。渡宋後の道元は天童山の長翁如浄に師事し厳しい修業の後二十六歳にして印可を得、尚二年の後、彼の地で病歿した師明全の遺骨を胸にして帰国したが僅か四年間の留学であったがその間、日本は大きく変貌し承久の乱直後で未だ混乱は治まらず特に既成仏教の新仏教への圧迫はなみなみならぬ状態にあり中にも専修念仏と禅に対する憎しみは眼を覆うものがあった。寛喜三年（一二三一）道元は洛外深草に興聖寺を創建し禅こそ仏法の正法である事を力説した、時に道元三十七歳であった、が而、叡山の圧迫は日を追って強まり遂いに寛元元年（一二四三）道元は主もな門弟と共に都をはなれ越前国志比荘に移り越前の地頭波多野義重の疵護のもとに翌年には法堂が、続いて僧堂が完成した。現在の曹洞宗大本山永平寺より更に二粁程山奥であったと伝承する。始め大仏寺と号し程なく永平寺と改称した。その後道元は輝やかしい業績を残し五十三歳にして歿するが道元亡きあと教団として曹洞宗の基礎を確立せしめたのは深草以来道元と辛苦を共にした高弟の孤雲懐奘であった。今尚道元の著書、懐奘の著書は曹洞宗の基本である。二世懐奘は禅の先覚者能忍の流れを掬む人で道元より二歳年長乍ら深草以来道元を師と仰ぎ良き後継者であった。

総持寺は能登国櫛比荘（門前町）に律宗の寺として古くから栄えて来たが元享元年（一三二一）道元の法曽孫常済禅師を招請して改宗開創された寺でその後は総持寺派として幾多の名僧を輩出し現在の総本山についての経緯については前述の如く内容については殆んど同じである。本県の曹洞宗はどの寺院でも両派には何んらかの関係を持ち一例を挙げると寺は総持寺派に所属し自らは永平寺の修業僧であるか又はその反対の例もあって両派との交流は極めて深い。織田信長は極端に真宗を嫌った。彼は一世を通じて戦闘に終始した、中で北陸の一向一揆、石山本願寺、紀伊長島に於ける苦戦等、度々の苦渋を舐めさせられ各地に於いて多くの将士を失っている。為に特に禅宗を疵護し敵、味方を問はず死者の冥福を祈る為に各地に寺を創建した。特に小牧市に在る正眼寺を中心とし、この寺の末寺として岐阜県の各地に曹洞宗の寺院が創建された。現在も尚曹洞宗の結束は固く年一回は正眼寺に於いてこれ等の寺の住職によって盛大な法要が催される。岐阜県でも伊奈波の勝林寺には織田信長の古い位碑を守り続け毎年六月の信長忌には同派の住職はこゝに集り盛大な法要が営まれている。尚総持寺は夙に布教に力を注ぎ本県の曹洞宗については総持寺に所属する寺院が多いのもその結果である。（この項終り）　―臼井重清―

勝林寺

県内各地のうごき

●岐阜市仏教会

三月十九日春季万霊塔法要、上加納山にて、
○五月九日木ノ木校下檀信徒総会並に追弔会、善福寺
○五月十五日鏡島校下檀信徒総会並追弔会、古市場公民館にて、
○五月二十九日京町校下檀信徒会総会並追弔会西別院
○六月三日本郷校下檀信徒総会並追弔会、専願寺にて
○六月一日二日、七月八日の二回に亘り身延山本山参拝旅行実施、参加人員百十三名
○岐阜市加納東仏教会・檀信徒会では、三月二十四・二十五日第十七回南紀古寺めぐりを行ない、バス二台参加勝浦温泉に一泊した。

●川辺町仏教会

三月三十日川辺町山楠殉難中国人慰霊塔前にて川辺町寺院一同による慰霊追弔法要厳修、午後より定例会開催、

●高山市仏教会

第十五回高山市仏教婦人大会が七月四日午后一時半より高山別院にて盛大に開催された。当日の記念講演講師は、金岡秀友師

金華檀信徒会の花まつりと物故会員追弔法要

五月八日、朝から雲一つなく晴れた蒼空の下に、金華校下の〝花まつり〟は矢場町本誓寺を会場に厳修された。

早朝から各役員は各部門を担当し、境内の清掃、飾りつけ、仏旗を中心として万国旗や垂れ幕等を張りめぐらし、白象を引き出し、明照幼稚園児も多数参加して花まつり気分は高調した。今年も又〝甘茶〟の接待をしたのでとても好評であった。

午後一時から参詣者は続々と本堂に集り、幼稚園児による献華献燈献香により花まつりの法会は始まり、次いで物故された会員の追弔法要には校下在寺の御法中二十数名の方により丁重に法要が営まれ、御遺族方もとても法莚に参した事を悦ばれた。

法会が終ってから昭和五十七年度の檀信徒会総会と御法話を拝聴して、今年度一の行事を終了した。

多数用意された〝甘茶〟と〝御供物〟とが不足した程の大盛会であったことを会員と役員とは喜び合いました。

関谷本巣檀信徒会長へ全日仏会長の感謝状

四月十七日、本巣郡仏教会、檀信徒会の五七年度総会が本年度当番町村である根尾村文化センターで開催された。当日、十余年に亘つて本巣郡檀信徒会長を勤められ、県仏教会の檀信徒副会長をも勤められていた関谷貞夫氏が高令の故を以て本春三月辞任せられたのでその永年に亘る功績をたたえ、その労に報いるため、特に全日本仏教会々長、日蓮宗管長金子日威猊下より感謝状がとどけられ、加納岐阜県仏教会長より贈呈された。関谷氏は穂積町本田の素封家で各種の役職に就かれ晩年、檀信徒会長に推された方で、極めて性温厚しかも常に清新な意見を以てリードされた。関谷氏はよろこびの挨拶をされ、午后の郡内戦歿者追悼法要后の高田好胤奈良薬師寺管長の記念講演を聴いて帰えられたが、計らずもその三日后に急性心不全で亡くなられた。遺影の前に供えられた仏教会の感謝状が氏の八十二年の生涯の最后を飾った。因に巣南町の林治雄氏が檀信徒会長に就かれた。また本年度の標語は「小さな親切、大きな喜び」（第十七号）で仏教ぎふ紙と共に全郡下に配布された。

感謝状をうけられる関谷氏

近況二話

七宗町東禅寺

一話

みんなでお経を習いましょう。

四月十日より、小学三年生から中学一年までが参加。お経の唱え方たいそうよくなりました。そのあとの何でも質問会、これが楽しい。

小学三年女子
「うちのおじいさん、おとうさんが、仏滅の日はおぞい日というがどういう日ですか。」

小学六年男子
「ほとけ様とかみ様とどっちがえらいのかね」

小学五年女子
「ゆうれいといってほんとにあるの」

こんな話が出てきて、話してやるの楽しいこと、子どもたちは、自分のなっとくのゆくまできいてきます。」

二話

わたしの健康法、我流三法の中の第二法

「北まくらでねる」

北まくらでねると何となくよい。

「ソリャオ前坊主だからヨ」

「坊主はやめて和尚といって下さいネ」

昔から死んだ人を北まくらにする。極楽へ行けるようにとされたのでしょう。

いつか、テレビの万才でいいました。大学受験者は就職受験者は、北まくらでねなさい、そしてねぎをたべなさい。私は万才だけでなく本当のことと思っています。大自然の磁石が、頭のてっぺんから足の先まで通るのであります。

おすすめします。又寝室磁器装置を考えています。